

(著者注：南アへの出張は1998年のことなので、今とは事情が大きく異なっている。)

南アフリカ素描（2）ーサバンナに行くー

——広大なる大地——

サバンナを走る道は、どこまでもまっすぐに伸びていた。地平線の彼方の山並に向って、道は一直線に走り、果てしなく草原が続く。曲がりくねった日本の道を見慣れたわたしには、数十キロも一直線の道が続く広大なサバンナは驚きであった。

わたしとガイドは、ヨハネスブルグから北西に車で2時間ほどにあるピラネスバーグ国立公園へ向かった。

この辺りは草原サバンナらしく、高木はたまにしか見られない。草原に雨が降るのは夏の一時期に限られ、今は乾期で身の丈ほどの枯れ草が広がっている。小さな集落にはティン・ハウス（ブリキ小屋）が点在し、野生のオリーブやオレンジの木が見られる。

サバンナの動物相は、意外に豊かである。一見何もないような草原にも、ライオン、もしか、^{れいよう}羚羊など多くの草食動物が潜んでいるとの事。

初秋とはいえ、日差しは強くTシャツとジーパン姿でも汗ばむほど。空は深く蒼い。成層圏が見えるかと思うほど空は高く、視界を遮る雲一つもない。わたしはこんなにも完璧な深い空を今まで見たことがない。視界には紺碧の空とサバンナと一本道が続くだけである。

ガイドは時折地名や集落の説明をしてくれるが、単調な景色が続くうちわたしはうつらうつらとしてきた。名も知らぬひばりに似た小さな鳥が、突然草むらから飛び上がる。ひばりといえば、大伴家持の歌がこの雰囲気にとくるとくる。

うらうらに
照れる春日に
ひばり上がり
心悲しもひとりし思へば

この歌は春愁を歌ったものだが、「うらうらに照れる春日に……」というところが、サバンナの風情にも不思議と合う。

フレアリーに運転を任せ、わたしは半ばまどろみながら公園を目指した。

——豊かな動物相——

ピラネスバーグ国立公園には、手つかずのままの大自然がある。

10数億年前火山が噴火し、大量のマグマを空高く吹き上げた。マグマは落下して付近一帯に

小さな岩石となって散らばった。噴火は幾度となく繰り返され、岩石の上に岩石が堆積し、火山灰地を作りだした。

公園といっても標高1,200メートルから1,700メートルに至る、およそ25キロメートル四方の広大な敷地である。人間がこのサバンナの一角を仕切って「公園」と呼んでいるだけで、動物にとっては仕切りはない。

レンジャーの同乗する屋根のない専用車に乗り、公園内を観察するのが普通だが、わたしはフレアリーの運転するベンツで回った。制限速度は40キロだが、野生動物を見るためには20キロ程度がよい。ここにはビッグ・ファイブと呼ばれるアフリカゾウ、ライオン、ヒョウ、サイ、バッファローの他、30種類の大型哺乳類、350種類の小鳥、65種類の爬虫類それに数千種の小動物が生息する。

動物相は場所によって異なる。岩場にはヒョウ、ヒヒ、岩飛び羚羊などの哺乳動物や、ヘビ、クモ、トカゲなどが生息する。水場には、ミズカモシカ、リードバック（羚羊の一種）などの他、ダック、ガン、ワシなどの鳥が水を求めて集まる。

草原はバッファロー、サル、サイ、ゾウ、キリンの活躍の場である。イボイノシシやマングースや大毒ヘビなどは平坦な砂地を好む。

しばらく低速で進行すると、道のそばの草木が踏み倒されている光景にであった。「近くにゾウがいるから注意して」フレアリーが小さく叫び、左右に注意しながら、車は進む。野生のゾウが見られると期待しながら、踏み倒された草木の跡をたどったが、足跡はやがて草原に向かってしまい、結局、見つからずじまい。

残念がっていると、今度は左手50メートルほど先に2本の角のある大型の動物が草を食べているのを発見。フレアリーに合図すると、「うん。あれはイーランドといってカモシカの一種だ」とのこと。

なおも進むと数十匹のヒヒが道を横切っていく。150～160センチはある大きなヒヒが、リーダーなのか恐れず車に向かってくる。道いっぱいにはヒヒが散開するため進むこともできず、車を止めてしばらく様子を見る。なかなか立ち去らない。危害を受けないように窓を閉め、車内に閉じ込めて立ち去るのを待つばかり。ここでは人間は脇役にすぎない。

その後30分ほど小鳥しか見かけなかったが、やがて小型のサイのような動物が枯れ草を食べているのに出くわした。ワーホッグ（Warthog イボイノシシ）との事。ワーホッグは野生のブタで、大きな牙を持ち、顔面にイボが多数ある。高さ70～80センチ、全長1メートル80センチくらいである。草の根を食べているとみえ、前足を折って盛んに土をほじっている。サンド・ロードを更に進んでいくと、突然2～3メートルはあると思われる大蛇が道の脇を進んでいる。パファダー(Puff Adder)といい、毒があり危険。

公園の見学はわずか2時間に満たなかったが、サイ、トビカモシカ、羚羊、ヒヒ、イーランド、ゲムスボック、クズーなどのカモシカ類、駝鳥、キバイノシシ、シマウマ、キリン、大毒ヘビなど、数多くの野生動物を見ることができた。

——野生動物料理——

公園からの帰途、二人で野生動物料理（ゲーム・ディッシュ）を食べにレストラン「カニボール」（Carnivore）へ行った。動物の保護区を見た後ゲーム・ディッシュを食べに行くのは不謹慎な気もするが、好奇心は押さえ難い。

カニボールは元々はケニアが本店である。店に入ると2メートル近くの看板があり、その日のメニューが書かれている。ポーク、チキン、ラムなどの肉料理もあるが、この日のゲーム・メニュー（野生動物メニュー）は駝鳥、羚羊、クズーなど。日によってはワニのステーキ、バッファローの舌、インパラのステーキ、クロコダイルのテールなどもある。

中央に10数メートルはあろうかと思われる大きな円形のバーベキュー・スタンドがある。それは巨大な焼鳥屋を思わせる。

1メートルはあろうかと思われる巨大な金串に刺した肉を、料理人が炭火でジュージュー焼く。パナマ帽に蝶ネクタイ、「カニボール」のロゴ入りのエプロン、それに真っ白なワイシャツを着て、口髭を蓄えた料理人が手慣れた動作で肉塊をひっくり返す。炭火は真っ赤にカッカと火照り、肉の脂が垂れ、煙が舞い上がり、巨大な焼鳥屋はその一角だけが戦場の騒ぎである。

シマウマの皮でできた椅子に座ると、まずスープ、サラダそれに各種のソースが運ばれてくる。ガーリックソース、チリソース、タルタルソース、クランベリーソースなど、肉によりソースが違う。

わたしを東洋人とみて黒人のボーイが笑いながら注文をとりにくる。

せっかく日本からやってきたんだから、なるべくいろいろなゲーム・ディッシュを少しづつ食べたいんだが……。

そういうと「それはついている。今日は久しぶりにゾウの肉が入荷していますよ」とボーイは愛想がいい。ゾウは保護動物だが、数が増えすぎないように間引いたゾウの肉がたまにレストランに出回るらしい。

早速「ゾウの足」を注文すると、ほどなく、ボーイが金串に刺した肉塊を抱えてくる。彼はマサイ族の伝統の刀を使って肉塊を少しづつ皿に切り落とす。肉は固くなかなか噛みきれないが、しみこんだタレがじわっと口に広がり、思いの外うまい。

ゾウに味をしめて、わたしたちは次から次へとゲーム・ディッシュをオーダーした。クズー

は鯨肉に似た味だし、駝鳥や羚羊はわりと雑駁な味である。

「ほんの少し……」と頼んでも大きな肉片を切り裂くので、3～4品食べるとたちまち満腹となる。肉と一緒に食べるのは、パプ (Pap) と呼ばれる外見はマッシュド・ポテト風のものの。メイズ (Meize どうもろこし) から作られた食べ物で味は極めて淡白である。食後はプディング、アイスクリーム、チョコレートムースなどのデザートがあり、最後はケニア・コーヒーで締めくくった。(続く)